

F-57

「立地適正化計画」を活用したみなとまちづくりに関する研究

—北海道室蘭市における市民意識から捉えた地域構造に着目して—

A Study on Minato-Machidukuri Using “Location Normalization Plan” in Waterfront Area  
- Focus on the regional structure from view of citizen recognition in Muroran City, Hokkaido -

○勇崎大翔<sup>1</sup>, 岡田智秀<sup>2</sup>, 三溝裕之<sup>3</sup>

\*Hiroto Yuzaki<sup>1</sup>, Tomohide Okada<sup>2</sup>, Hiroyuki Samizo<sup>3</sup>

Abstract: The purpose of this study is to clarify the method of Minato-machidukuri using “Location Normalization Plan” in Muroran city, Hokkaido. As a result, this paper clarified following; (1) Daily activity zones of Muroran city, (2) Zones that provide the identity of Muroran, (3) Elements that characterize the identity of Muroran.

**1. 研究目的;** 人口減少や超少子高齢社会といったわが国の都市問題に対応すべく、コンパクトなまちづくりを目指す「立地適正化計画（以下；立適）」<sup>1)</sup>の策定が各地で展開されてきた。この取り組みは、港湾を有する地域においても実施されている。これまで港湾政策と都市政策は別々に扱われ、両者一体とした地域ビジョンの形成は希薄であった。しかし、これを機に港湾エリアにあっても、「立適」における都市機能誘導区域<sup>(1)</sup>や居住誘導区域<sup>(2)</sup>等の設定を通じて、港湾エリア（主に臨港地区）と都市エリアが一体となる“みなとまちづくり”の推進に期待がかかる<sup>2)</sup>。その推進にあたっては、単なる机上の政策にとどめずに、地域住民の意識から捉えた地域構造をふまえ、港湾と都市の両エリアをいかにつないでいくかの具体的な手立てを講じることが重要となる。

そこで、本研究では、平成31年3月に「立適」を策定した港湾都市である北海道室蘭市<sup>3)</sup>を対象として、市民の意識から捉えた地域構造をもとに、当該計画の妥当性と課題点について明らかにすることを目的とする。

**2. 研究方法;** 以上を踏まえ、表1のアンケート調査を実施した結果、被験者32人中、30人の有効回答を得た。

表1 調査概要 [筆者作成]

アンケート調査	
調査日	令和元年8月31日(土)
調査対象	室蘭市で実施されたまちづくりトークイベント参加者全32人(有効回答30人)
調査項目	・室蘭市内でよく使用する施設(5つ以内) →被験者がアンケートシートに記入
	・室蘭市内でよく行動する範囲 →被験者が地図上に記入
	・室蘭港周辺で行動する際の目的と頻度(3つ以内) →被験者がアンケートシートに記入
	・室蘭らしいと感じる事物(5つ以内) →被験者がアンケートシートに記入
被験者の属性	・室蘭らしいと感じる範囲 →被験者が地図上に記入
	・室蘭港らしいと感じる事物(5つ以内) →被験者がアンケートシートに記入
性別	男性:26(86.7%), 女性:4(13.3%)
年齢	20~30代:12(40%), 40~50代:9(30%), 60~70代:7(23.3%), 80代以上:2(6.7%)
職業	会社員:3(10.0%), 自営業:3(10.0%), 公務員:7(23.3%), 学生:7(23.3%), 主婦:1(3.3%), 無職:7(23.3%), その他:2(6.7%)
居住地区	港南地区:4(13.3%), 中央地区:8(26.7%), 蘭中地区:1(3.3%), 輪西地区:2(6.7%), 東地区:1(3.3%), 中島地区:4(13.3%), 東明地区:6(10%), 八丁平地区:1(3.3%), 本輪西地区:1(3.3%), 白鳥台地区:1(3.3%)
居住年数	2~5年:5(16.7%), 6~10年:5(16.7%), 11~20年:4(13.3%), 21~30年:3(10%), 31~40年:0(0.0%), 41~50年:2(6.7%), 51年以上:8(26.7%)

1: 日大理工・学部・まち 2: 日大理工・教員・まち 3: 日本工営株式会社

**3. 結果および考察;** 表1のアンケート調査により、被験者が地図上に記入した「生活行動領域」と「室蘭らしいと感じる領域」のそれぞれについて100mメッシュで分割し(各々合計8,612メッシュ)、集計結果を示したものが図1、図2である。また、両図において、各領域が2割以上集中した場所のうち「生活行動領域」をゾーンA、B、「室蘭らしいと感じる領域」をゾーンC、Dとし、ゾーンA、Bの「日常利用施設」とゾーンC、Dにおける「室蘭らしい事物」のそれぞれ上位3項目を示したものが表2である。また、表3は室蘭港周辺での「行動頻度」と「行動目的」を示し、表4は、市内全域でみた「室蘭らしい事物」と「室蘭港らしい事物」の上位5項目を示したものである。以降はこれらをもとに考察する。

**(1) 市民の「生活行動領域」;** 図1より「生活行動領域」として4割以上が指摘するエリアをみると、ゾーンAの「中央地区」とゾーンBの「中島地区」の2か所にみられることがわかる。両ゾーンはいずれも都市機能誘導区域や居住誘導区域と重なることから、その設定は妥当といえよう。そこで、これら領域づけの要因を捉えるために、各ゾーンの「日常利用施設」(表2)をみると、両ゾーンともに「商業・物販施設」が最も多く、その他の共通点としてゾーンAの「集会所」(9.8%)とゾーンBの「きらん」(17.9%)という、市民の集いの場が挙げられ、市民の日常生活におけるその重要性が伺える。また、市民の室蘭港周辺への「行動頻度」(表3)をみると、「週に1回以上」(33.3%)と「ほとんど行かない」(36.7%)で二分しており、室蘭港に積極的に訪問するか、さもなければまったく意識が向かないという実態が浮き彫りになった。そこで、市民の「行動目的」(表3)をみると、「散策」(44.4%)が最も多く、ゾーンC(中央地区)やゾーンD(祝津町)が主な散策地であることがわかる。これより、日常生活行動からみて「中央地区」は最重要エリアといえよう。

(2)「室蘭らしいと感じる領域」とその要因; 図2より、2割以上が指摘するエリアをみると、ゾーンC(中央地区)とゾーンD(祝津町)のみが挙げられる。そこで、市内全体でみた表4の要素に着目すると、「室蘭らしい事物」と「室蘭港らしい事物」が概ね共通しており、「白鳥大橋」のほか室蘭港を構成する諸施設が挙げられている。その他には、「室蘭らしい事物」として、僅かではあるが「中央町商店街」(9.2%)もみられた。他方、前項の「生活行動領域」で指摘が集中したゾーンB(中島地区)では、室蘭(港)らしい事物が上位項目でみられなかった。

(3)まとめ; 以上のことから、本調査結果を通じてみると、本市全体としては、室蘭らしい事物と室蘭港らしい事物に共通性が高く、室蘭港周辺に市民の意識が向けられている実態が捉えられた。さらに、中央地区(ゾーンC)においては、市民の日常生活行動や散策行動の中心となるなかで、室蘭らしい事物や室蘭港らしい事物も享受できるという地域性が捉えられた。このことから、当地区に設定された都市機能誘導区域と居住誘導区域の重なりは妥当であるといえ、上述した地域性を重視して、その特徴をより向上させる取り組みが期待されることである。

他方、もうひとつの日常生活行動の中心となる中島地区(ゾーンB)では、都市機能誘導区域と居住誘導区域が重なるエリアであるものの、本市を特徴づける事物がみられないことから、地域性を強化すべく地区内の地域資源の発掘や回遊性の創出などが喫緊の課題となろう。

謝辞; 本調査にご協力頂いた、日本工営(株)の溝口伸一氏、宮下奈緒子氏、前田夢氏に厚く御礼申し上げます。本研究は、研究奨励寄付金(日本工営(株))による。  
 補注; (1) 都市機能誘導区域とは、医療・福祉・商業等の都市機能を都市の中心拠点や生活拠点に誘導し集約することにより、これらの各種サービスの効率的な情報提供を図る区域である。/ (2) 居住誘導区域とは、一定エリアにおいて人口密度を維持することにより、生活サービスやコミュニティが持続的に確保されるよう、居住誘導を促進すべき区域である。  
 参考文献; 1) 国土交通省: 「みんなで進めるコンパクトなまちづくり〜いつまでも暮らしやすいまちへ〜」, <https://www.mlit.go.jp/common/001195049.pdf> (最終閲覧日: 2019.9.23) / 2) 都市計画通信社: 港湾空港タイムズ, 都市計画通信社, p.1, 2019.6.3 / 3) 室蘭市: 「室蘭市立地適正化計画」, <http://www.city.muroran.lg.jp/main/org/7310/documents/ritekij.pdf> (最終閲覧日: 2019.9.23)

表3 室蘭港周辺の「行動頻度」と「行動目的」 [筆者作成]

行動頻度 (N=30)	人数 (%)	行動目的 (N=36)	件数 (%)
週1回以上	10人 (33.3%)	散策(ゾーンC, ゾーンD, その他)	16件 (44.4%)
月1回程度	4人 (13.3%)	釣り(ゾーンC, ゾーンD, その他)	5件 (13.9%)
6か月に1回程度	4人 (13.3%)	温泉(ゾーンD)	3件 (8.3%)
ほとんど行かない	11人 (36.7%)	パークゴルフ(ゾーンD)	3件 (8.3%)
不明	1人 (3.3%)	イベント(ゾーンC)	3件 (8.3%)

(注) 室蘭港周辺の行動目的は複数回答を含む。  
 表4 本市全体でみた「室蘭らしい事物」と「室蘭港らしい事物」 [筆者作成]

No.	室蘭らしい事物 (N=98)	件数 (%)	室蘭港らしい事物 (N=66)	件数 (%)
1	白鳥大橋	13件 (13.3%)	白鳥大橋	17件 (25.8%)
2	工場群	13件 (13.3%)	フェリーターミナル	9件 (13.7%)
3	室蘭港	11件 (11.2%)	工場群・工場夜景	8件 (12.1%)
4	中央町商店街	9件 (9.2%)	中央ふ頭	8件 (12.1%)
5	地球岬	9件 (9.2%)	エルムーンマリーナ	3件 (4.5%)

(注) 各事物は複数回答を含む。

表2 ゾーンA, Bにおける日常利用施設およびゾーンC, Dにおける室蘭らしい事物の内訳(複数回答を含む) [筆者作成]

No.	ゾーンA		ゾーンB		ゾーンC		ゾーンD	
	日常利用施設 (N=51)	件数 (%)	日常利用施設 (N=39)	件数 (%)	室蘭らしい事物 (N=38)	件数 (%)	室蘭らしい事物 (N=24)	件数 (%)
1	商業・物販施設	22件 (43.1%)	商業・物販施設	24件 (61.5%)	室蘭港	11件 (28.9%)	白鳥大橋	13件 (54.2%)
2	勤務先	14件 (27.5%)	きらん	7件 (17.9%)	中央町商店街	9件 (23.7%)	エルムーンマリーナ	5件 (20.8%)
3	集会所	5件 (9.8%)	東室蘭駅	4件 (10.3%)	旧室蘭駅舎	7件 (18.4%)	市立室蘭水族館	3件 (12.5%)

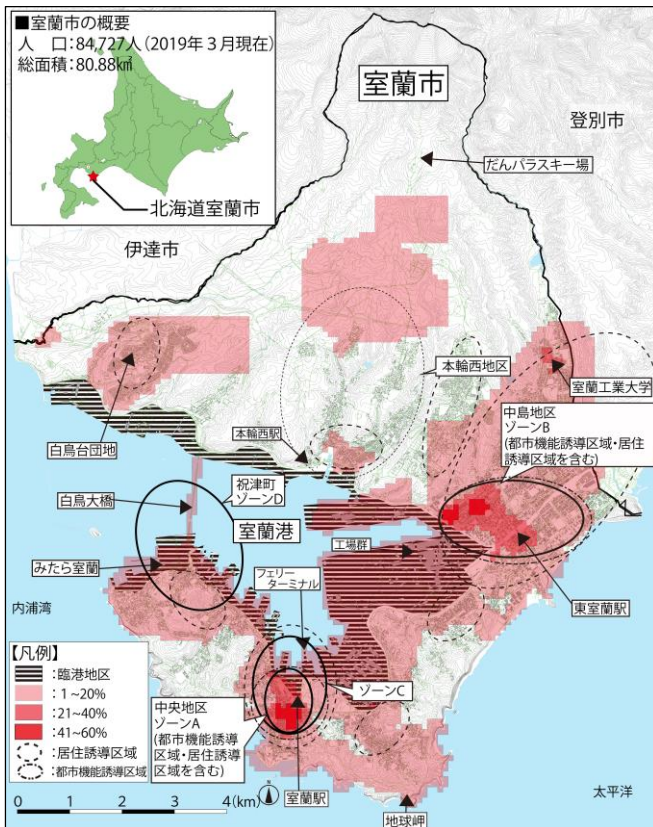


図1 室蘭市民が日頃行動する「生活行動領域」の分布 [筆者作成]

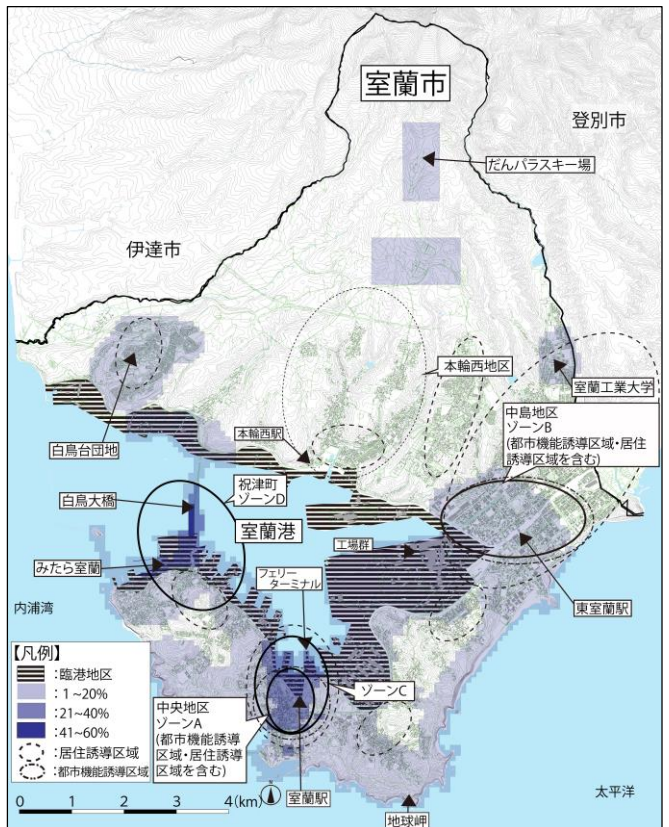


図2 室蘭市民が「室蘭らしいと感じる領域」の分布 [筆者作成]